

第1回 アライグマ編

講師 上野真由美さん

2023年6月25日「みんくる」での講演から



うえの・まゆみ さん

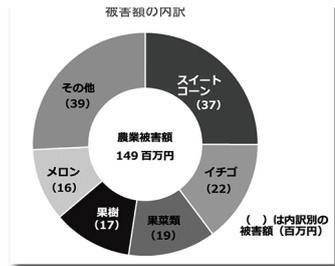
地方独立行政法人北海道立総合研究機構 産業技術環境研究本部エネルギー・環境・地質研究所 研究推進室主査。博士（農学）、獣医師。

この講演録は、たきかわ環境フォーラムのホームページで全文をお読みいただけます。



アライグマが「外来生物」だということは、みなさんご存じだと思います。アライグマの自然分布地域は北アメリカ大陸です。北海道での生息が初めて確認されたのは1970年代後半といわれ、「いる／いない」で区別するならば、アライグマは現在、ほぼ全道に生息しています。

勢力拡大にともなって、私たちに身近なところでも、いろいろな悪影響が出てきています。農業被害、人家への侵入による生活被害、また在来生態系への影響などです。



たとえば令和3（2021）年度の集計を見ると、農作物被害総額1億4900万円のうち、1/4ほどをスイートコーンの被害額が占めていました。イチゴ、果菜類、果樹、メロンと、糖度の高い作物から先にやられていることが分かります。

被害を受けている畑では、

「犯人」を捕まえることも大事ですが、そのシーズンの実りを確実に守るために、とにかく侵入防止措置をとることが必要です。金網や樹脂ネットで畑を囲うだけでは、木登りが得意なアライグマには通用しません。私たちが推奨しているのは、電気柵を使った防護です。とはいえ、アライグマ防除が「農作業の一環」としてルーチン化するところまでは、まだいっていません。

とくに木立のそばに建っている空き家などは、冬のねぐらとしてアライグマによく利用されていますが、人目につかないため、なかなか報告も集まりません。今後、地方から人口が減って空き家が増えるにつれて、この「家屋侵入」問題がクローズアップされていくだろうと予想しています。

私たちは、アライグマの生息数を確実に減らすためには500m四方に1台ずつワナを仕掛ける必要がある、と推奨しています。しかし、これまでアライグマが捕獲された数と位置を地図上に表してみると、たしかにワナを仕掛けた場所では実績がありますが、それ以外のほとんどの場所では、実は捕獲努力が払われてすらいません。現在の捕獲ペースでは、今後もアライグマはどんどん増えていくばかりです。

最新知見を地元伝えて役割分担を図ろう

このようにアライグマの影響は、農業に限らず、住民のみさんの身近なところにも及んでいるのですが、残念なが

ら、被害の実態すらはっきり見えていません。そのせいもあって、研究機関は何をすべきか、市町村役場の役目は何か、住民にも可能な協力方法はないのか、問題点の整理や体制づくりも、まだこれから、という段階です。

今年3月、私たちは北海道と共同で、初めて「北海道アライグマ捕獲プログラム」を策定しました。これからどうやったらアライグマを効率的に減らせるか、手法や技術を載せています。

Q&Aのページでは、「捕獲従事者を増やすにはどうしたらよいでしょうか?」という設問に、「被害を受けている農家や地域住民などに広く呼びかけることで、新たな捕獲従事者を確保できるかもしれません」と回答しています。

たとえばワナによる捕獲作業は、ワナ設置▶エサを撒く▶見回り（捕獲）▶殺処分施設への運搬▶殺処分▶処理施設への運搬……と進んでいきますが、このうちはじめの「設置」や「エサを撒く」「見回り」の部分は、未経験者でも分担可能です。

アライグマ対策は、必ずしも専門的な技術や経験が求められる場面ばかりではありません。痕跡調査や、侵入防止対策が必要な農家さんの支援活動など、一般の住民のみさんにも活躍の場があると思います。

近年、各自治体で鳥獣害対策に取り組む「地域おこし協力隊」員が増えています。鳥獣担当者が一人きりしかいない役場は少なくありませんが、これら「おこし隊」の人たちは、実働的かつ行政的な仕事に携わりながら、私たち研究機関や既存の普及指導員さんたちとも連携して、協働を実現するキーパーソンになりうると思います。

出典

- 北海道「令和3年度 北海道におけるアライグマの生息等の状況」
- 北海道アライグマ捕獲プログラム
- https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/araiguma/araiguma_top.html



第2回 エゾシカ編

講師 松浦友紀子さん

2023年8月26日「みんくる」での講演から



まつうら・ゆきこ さん
博士（獣医学）。一般社団法人エゾシカ協会専務理事。

この講演録は、たきかわ環境フォーラムのホームページで全文をお読みいただけます。



エゾシカの現在の推定生息数は72万頭と報告されています。ただ、数字そのものより、その数が増えているのか減りかけているのか、それとも変化していないのか、トレンド（傾向）を把握しておくことが重要です。北海道の中部・北部・東部・南部、いずれの地域をみても、エゾシカは近年、また増加しつつあります。

こうした状況で、まず取り沙汰されるのは農作物被害でしょう。林業への影響も小さくありません。生物多様性への影響はどうでしょう？ シカが生息する各地の森で、雨のたびに表土が流れて、木の根が露出してしまいう現象が起きています。森の下層植生（背の低い草花など）がシカに食べ尽くされてしまい、地中に張っていた植物の根がなくなったせいで、土が崩れやすくなっているのです。

最近、列車や自動車との衝突事故が増えています。ここ滝川市を含む空知振興局管内をみても、シカが関係する事故は最近だと年間300件くらい起きています。

まずは相手のことを良く知ることから

いま、私たちの社会が許容できないほどのあつれきが生じているのだとすれば、それはやはり「シカの数が多すぎるせい」ということになると思います。現在の北海道では、自然死するシカはわずかで、このまま放置しておいて、シカの数が増える、とはほとんど期待できません。

だからハンターさんたちが頑張っています。道内ではこのところ、毎年だいたい13万頭ずつのエゾシカが捕獲されています。世界的に見ても、日本の狩猟者はすごく頑張っていると思います。ただ、頑張って捕獲してシカの数減らせたとしても、油断は全くできません。その後も毎年、同じくらいの強度で取り続けないと、すぐ数が増えてしまうでしょう。

こんなふうに話すと「お先真っ暗」というムードになってしまいますが（笑）、つねに人が手をかけ続けなければなら

ない相手、これからも本当に長く「おつきあい」の続く相手だ、という認識が必要だと思います。

発想を転換すれば、身近にたくさんシカがいて、持続的に捕れるからこそ、私たちが未永く受け取れる恩恵もある、と思います。一番の恩恵は、シカのお肉をずっといただける、ということです。

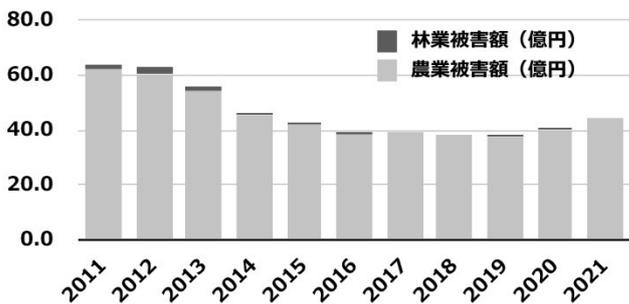
現在、日本全国で捕獲されるシカのうち、食肉利用されているのは13.7%、という数字が公表されています。日本の中では北海道はシカ肉利用の先進地ですが、欧米各国と比べるとまったく違ってきます。たとえばイギリスでは、捕獲したシカの6割が自家消費、4割が流通に回っていて、未利用のまま廃棄されるのは数%の個体に過ぎません。そういう国の友人に北海道の状況を話すと、「MOTTAINAI!」とよく言われます。彼らにとっては、自国内の野生のシカは「資源」そのものなのです。

わたしたちエゾシカ協会は、2020年に「エゾシカ管理のランドデザイン」をつくって、10年後20年後の未来にこうあるべき、と提言しています。がんばって捕獲し続けてシカの数が増えてきたら、利用率をどのくらいに保つか、毎年どのくらいのシカを収獲できるか、といったシミュレーションを紹介したり、その担い手をどう育成していくか、新しい制度を提案したりしています。

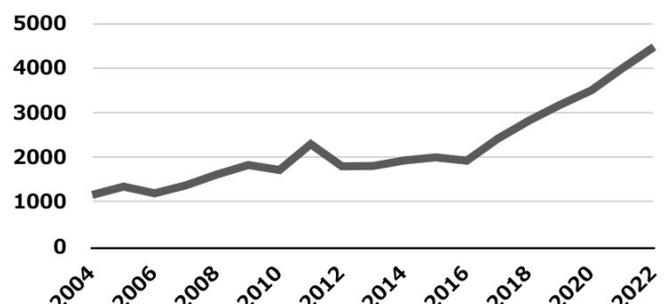
どんな対策も、まずは相手のことを良く知らないことには始まらないと思います。シカのことをもっと知ってもらい、単なる害獣ではない、ごく身近な動物だというふうに認識してもらえたらと願っています。

出典

- 北海道「令和4年度(2022年度)エゾシカの推定生息数等について」
www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/8/9/5/1/6/1/3/_/R4エゾシカ推定生息数等_230803公表版.pdf
- 北海道警察「エゾシカが関係する交通事故の発生状況(令和4年中)」
www.police.pref.hokkaido.lg.jp/info/koutuu/sika_jiko/sika_jiko.pdf



エゾシカによる農林業被害額の推移



エゾシカが関係する自動車事故件数の推移

第3回 ヒグマ編

講師 武田忠義さん

2023年10月28日 滝川市市民交流プラザでの講演から



たけだ・ただよし さん

北海道環境生活部自然環境局野生動物対策課ヒグマ対策室主幹。
獣医師。たきかわ環境フォーラム会員。

〈ヒグマの有害捕獲へのご理解について

ヒグマの捕獲に従事される方々は、地域の安全・安心な暮らしを守る上で、欠くことのできない存在です。人身事故や農業被害の防止のため、鳥獣保護管理法に基づく許可を受け、適正に行われた捕獲に関して、捕獲に従事された方（ハンター）が非難を受けることは、地域のヒグマ対策の根幹を担う捕獲の担い手確保に重大な支障を及ぼしかねません。皆様には、捕獲に携わる方々が、道民の生活を守るために、安心して捕獲に取り組んでいただけるよう、法に基づく捕獲の制度や捕獲従事者の方々の社会的な重要性をご理解いただきますようお願いいたします。〉

ここに掲げたのは今年9月、北海道がX（旧twitter）の北海道公式アカウントに投稿した文章です。ヒグマを駆除するたびに、主に本州の方たちからですけれども、「可哀想なことをするな」「二度と北海道なんて行かない」といった抗議が寄せられます。それに対して「やむを得ない捕獲もあるのです」と訴える公式見解を投稿をしましたら、なんと2000万回を超える表示……。「暮らしを守ってください」「ハンターの人たちの苦勞を知りました。感謝します」といったねぎらいの言葉が多く寄せられました。みなさんの関心がすごく高いことに改めて気づきました。

われわれヒグマ対策室は、各市町村から目撃情報を集めています。北海道警への通報件数を集計してみると、9月末時点で3000件を超えています（札幌と知床半島を除く集計）。過去5年と比べて、すでに年間通報件数の最多記録を更新しました。もちろん通報のすべてが本当にクマかどうかは分かりません。でもこういう状況だと、恐怖心が先に立って、何でもクマに見えてしまう。「ゴーストベア（幽霊グマ）」と呼んでいますが、それも含め、人の生活にクマが大きな影響を与えているのは確かです。

もはや遠い世界の生き物ではない

北海道は、科学的知見に基づいて、ヒグマの生息数を推定して公表しています。推定値なので誤差を広く見積もっていますが、最新の数字として、2020年現在のヒグマの推定生息数は、中央値で約1万1700頭です。1990年ごろの生息数は推定約5500頭。つまりヒグマの数は、この30年間でおよそ2倍に増えた、と考えられます。

過去をふり返ってみると、人とヒグマとのつきあい方には、いくつかのターニングポイントがあったことが分かります。

明治以前、アイヌの人たちはヒグマをキムンカムイ、山のカムイというふうに呼んでいました。アイヌにとってのカムイとは、自分たちに利益をもたらしてくれる「よい神様」のことをさします。クマのお肉は、きちんと調理すると、とてもおいしい。そのうえ、毛皮も利用できますし、胆嚢（熊胆）は医薬品原料として和人に特に高く売れます。アイヌにとって、ヒグマがとても重要な資源だったのは間違いないでしょう。いっぽう、人に危害を加えるヒグマを、アイヌはウエンカムイ（悪いカムイ）と呼びました。そんな両面を持つヒグマに対して、アイヌの人たちは、コタンに近づいてくるクマがいたら遠慮なく捕まえて、ウエンカムイだったら食べちゃうし、キムンカムイの子どもだったら大事に育ててから、イオマンテを催してカムイの世界に送る、そんなつきあいかたをしていました。言葉を換えると、じょうずな資源管理が伝統的に行なわれていた、といえると思います。

ところが明治時代になると状況が変わります。たくさんの方が入植してきて、家畜を飼い、畑を開くようになると、ヒグマは、そうした人間の生活を妨害する害獣とみなされ、駆除されるようになりました。これが第1のターニングポイントです。

第2のターニングポイントを迎えるのは昭和時代です。十勝岳が噴火して一時的な気候変動が起き、寒冷化が進んだこともあって、各地でヒグマによる人身事故が相次ぎました。1960年代以降、ヒグマをもっと積極的に駆除するための「春グマ駆除制度」がスタートし、1990年まで続きました。これが第3のターニングポイントです。

「春グマ」中止の後、またもやあつれきがだんだん高まってきて、保護管理が必要だという認識が広がって、道庁でも2000年ごろからさまざまな計画を打ち出して、科学的データに基づくヒグマ管理をしようとしてはいます。けれども、なかなか現状に追い付くことができずに、あつれきが顕在化して、人とヒグマとの関係は、いまや第4のターニングポイントに差しかかっていると思います。

ヒグマはもはや遠い世界の生き物ではなく、いつでも出会う可能性のある生き物、というふうには認識いただければと思います。もちろん、人間の生活は守られなければなりません。ヒグマが存在する、ということをおろそかにせず、そんな環境のなかで、安心して暮らすにはどうしたらよいか、それを考えなければならない時代になったんだと思います。

たきかわ環境フォーラム20周年記念 たきかわエコフェスタ2023

シンポジウム 野生動物は行政界にお構いなし

2023年11月18日13:30～16:00 滝川市民交流プラザ小ホール



20th
Anniversary

開催の趣旨

クマやシカに代表される野生動物の存在は、北海道の「自然の豊かさ」を象徴していますが、人間社会とのあつれきは避けられず、どのように共生を図るかは、地域に暮らす住民にとって、また地方自治体にとって、大きな課題です。今年6月から連続開催したエコカフェ「暮らしに身近な野生生物たちとのつきあい」で講師を務めていただいた野生動物保護管理の専門家のみなさんをパネリストにお迎えし、最新情報を共有しながら、解決を目指して議論します。

- 【日 時】 2023年11月18日（土）13:30～16:00
【会 場】 滝川市民交流プラザ 小ホール（滝川市明神町2丁目2-16 ホテルスエヒロ内）
【主 催】 たきかわ環境フォーラム
【後 援】 滝川市
【入場料】 一般500円 高校生100円 中学生以下無料

プログラム

- 13:30 開演 司会・越後弘（たきかわ環境フォーラム事務局長）
- ごあいさつ 平田剛士（たきかわ環境フォーラム代表）
- 13:40 （1）話題提供 「市有林道を利用する野生動物たち 自動撮影カメラの記録から」
長澤秀治さん 北海道滝川高校教諭、たきかわ環境フォーラム
- 14:10 休憩（20分）
- 関連書籍などの販売／ヒグマ事故防止啓発パネル展／ほか
- 14:30 （2）パネル討論 「中空知で考える アライグマ・シカ・クマとのつきあい方」
パネリスト（50音順）
- 上野真由美さん 農学博士、獣医師、道総研エネルギー・環境・地質研究所研究推進室主査
武田忠義さん 獣医師、北海道野生動物対策課ヒグマ対策室主幹
長澤秀治さん 北海道滝川高校教諭、たきかわ環境フォーラム
松浦友紀子さん 獣医学博士、一般社団法人エゾシカ協会専務理事
- コーディネーター 平田剛士（たきかわ環境フォーラム）
- 16:00 終演